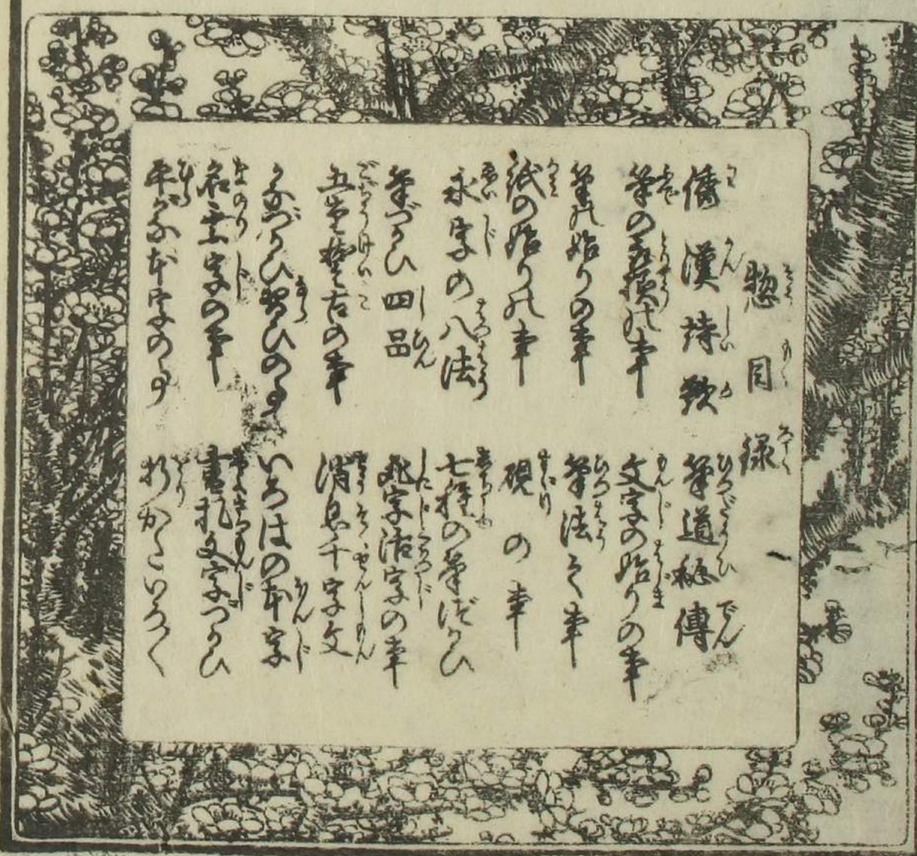
大和漢朝詠集

能名所

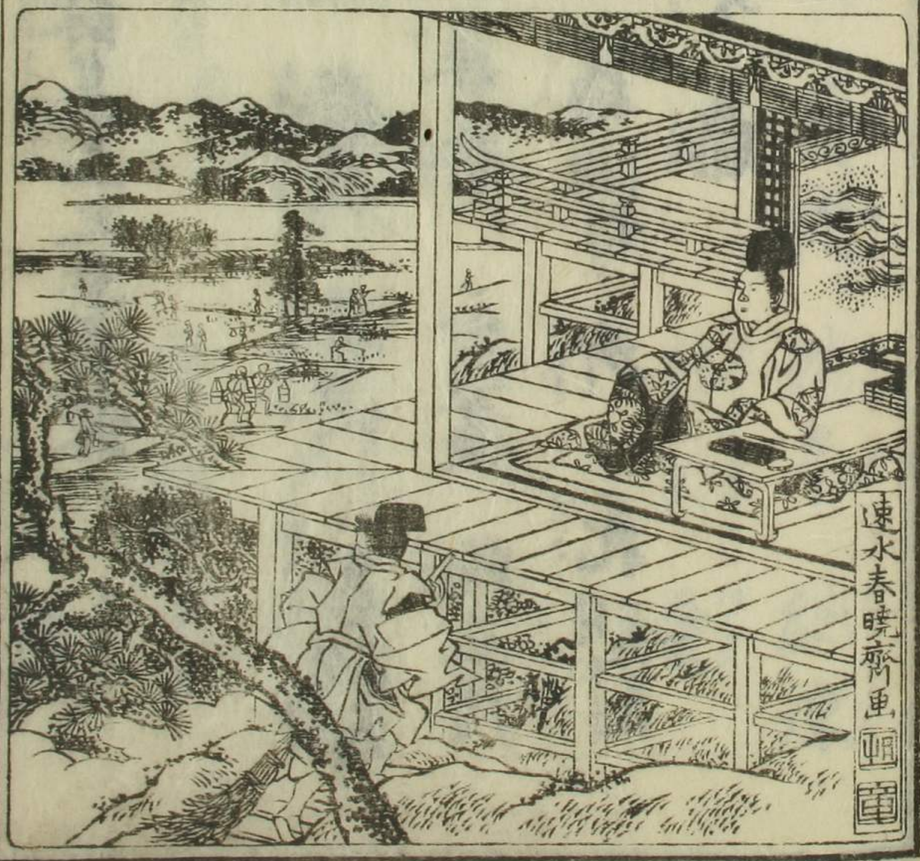
津田文庫
文庫1
1633
1

大寛倭漢朝詠集 巻之上



1633
010190600969

朝詠集い四条大納言公任卿大
二條関白教通公いまゝ大納言
おもせ山は聲よれなまくしに祝の
為さへうとそ遊ゝあつ和国者
ゆとそ〻ひをのべ唐土ゝ海を低
ゝて西の海を奉れ御ものを法式を伝
て天武天皇の御子大伴の皇子
らゝめて侍従ゝつうゝひゝう
此法世くさんに和ゝまゝて
ゝ朗詠のすてあもびくゝう
朗詠ゝの人いさのゝうゝとく更
ゝう侍ゝようゝと分そゝう匠
ゝのゝ朗詠あつめゝひゝ西
岩倉山の山ゝとに朗詠者ゝ有



大賓優漢朗詠集上之巻目録

春

立春　早春　春興　春夜　子日付若菜

三月三日付桃　暮春　三月盡　閏三月

鶯　霞　雨　梅付紅梅　柳　花付落花

鄭蹟　款冬　藤

夏

更衣　首夏　夏夜　端午　納涼

晩夏　花橘　蓮　郭公　螢

蟬　扇

秋

立秋　早秋　七夕　秋興　秋晩

秋夜　八月十五日付月　九月九日付菊

月前　女郎花　萩　蘭　撞

歳暮　紅葉（付落葉）　鴈（付渡り）

冬

初冬　冬夜　歳暮　焚火　霜

雪　氷（付春氷）　霰　佛名

大宮傳深良朗詠集上之巻目録終

春

立春

早稲田大学圖書館藏書

つゞ文庫

遠山潛開。不待黄鶯之囀。候遠水

乍変初春之景。希逢春之恩

池塘東頭風暖。雪消西面水流

柳亡新力除先動。沼有波文氷面開

七日不知淮水春風吹一時来

筆道秘傳

○筆をもつの事
まの文字は独そくとしてすれ
ども紙に二寸ばかりこすべし

頭指のうらと大指の腹と二ツをもつて是を中指と小指と薬指のうらとをもつてせたちうとまるべしちうこうの筆をもつてこうまをたと

秋風清夏雨
雲晴月出山
春日遊人
花下
良春

紫雲
紅霞
紀之

水清田地
蓮
忠峯

光遠
紅葉
元接

東岸西岸
柳
白

枝
梅開
落已異

紫藤
蘭
春
梁
宝
蓮
清
枝
裏

氣霧風
柳
初
柳
清
波
春
顔

遊
紅
氣
清
波
林
霞
霞
輝
富
紀

いと
たち
ひの
ひ
ふ
なり
ふ
ゆ
ふ
邦

山
ふ
な
や
の
ろ
ま
ふ

はひ
の
ふ
ま
く
は
ま
ま
ま

ま
ま
ま
ま
ま
ま
ま
ま

保
亂
聖
天
教
秀
紀
細
玄
去
生
生
正
沈
聖
聖

○梁の文珠ぞうの指とひやうせう爰の大ぜす二名
○梁の文殊のまねこ猫
○梁の文殊の眼とき・あびたるびやうこの文殊の眼とき・あびたるびやうこの文殊の眼とき・あびたるびやうこの

きさらのこまひろいに入
いなづまに入にわびしき
入親ちまたにきくはまもみ
ぢの若ゐるが孝子のうめに
ひかりとれ海のりとこの
ごろきさらぬのぞき孝をえん
えびんとのこまへまぶを
うけてちさにえぢひひぎ
とかめてきろいかろけく
ゐ花植生のおやまいぶよ
こをとりしんぐしそてしんで
おろけるひ本孝をとえさ
まひて文字をまふんだんに
本孝をうばいどおせるけ
ふでとえせんそめるふの脇
ひそ結ぶる毛掘とびんを

子日　付若菜

倚松樹〻靡〻腰習風〻雖紀四季

孝而嚙〻弱氣味〻見潤也

依松根而靡〻腰子年之翠波手折

梅花而挿〻髮二月之書落衣

孫のひろまあつるをけひめこまり
ひうくやちよのうけをまこやし
ねのひするおろかなる年
ちよけふるひ

書　教　清　古

紙　宝

たまに手松つぐ尺そうら
やひこうぶ巳巳のたまひ
ろいに辺麻毛をとりとり
我すのちぎ義べ〻あと清
ふ更とそ湯りなまふまろ
ふりの猫仲ぶ家ふ白にく
麻毛をとりとあてけの後に
れいに巳ちぶ尺ぶこうなまひ
て藤の芳にく結せのふ
手松ふひと更て時ぶす
なくやるずかてに巳に
湯りちんとちこまふ手芳
ふりのけるいぶまにう
わにしますこりれいかの
にいのぶ孫をれにあり
ぞそ清ぶぐにんさ

ちこせまてうに松もけ人ようを
ふりひうふくようつ代やを年

若菜

堂中之毛菜世事推之蕙心燈下

和義〻俗人屬〻藏指

ありうそワふはまちんうをれ
なりのそゆくめふ
あとうはうふつまんとちめしのふ
きみのもうつをゆはまりつ
ゆくくみねしのとろの野れ
うさふつあるるうれなりけり

紙　宝　芳亟社　人丸　赤人　世之

さらずとも松さくらのそひとる
すに年ひさしく世にあの文珠と称
なるに拙いかゝに拙にて
さらあるを肯はしそ
ばかりくそひるそ
水の文珠へまゐりてゆく
一夏月のねがひとそねがひ
たのひまのひこちなく
けくして

三月二首 付桃

春来迎花桃花水。無仙源何処尋

王維

去之年月〻三朔天辞于花桃花之
盛也。我君一日〻澤万機〻餘。無為
雖遥遺摩。雖絶書已字而知地
勢。思魏文以数風流。意志〻而之
遊歩中序云尓

茂

筆法之事

錦帳暁開雲母殿
白珠秋寫水精盤

[illegible]

[illegible]

[illegible]

殘風切付花と判ず先達のいはく春と雖花とこころへむべしとのこと

行

一　古宇宙より模二淡墨桜の枝色下葉付行

枝のまつり葉ぐりひやくし葉ちらの不後悔の葉を出べし春の中六月に枝とおなじ葉の中六月に枝とかくし葉を春ぐるふ葉をてはにおとすはるの時を春と角と葉とをてはぐるにつくるべしはるの枝の葉と

暮春

梯水柳花之芳路三月橋景吉夫二月

元稹

偃蹇沙蹈潮落曉孔絵壁之古苔深

黄香

人之交水潤須臾年不老之酒量更

小野篁

劉白花今日好逢之時不言何

源順

つつまはすはなれとくみまくとすくなし

三月曲

奥風

出べしはるの中庸のあいだ春夏ふ西東月日のことのもとめ初月花のなり

第一　毫中にてるを枝て枝よ枝枝ぐりもの枝をとりるぐるく作之葉の葉ぐりひと八月四るひるく葉ぐりもの葉と葉と葉花つくるくるくとしてぐるくとりぐるくるくるく

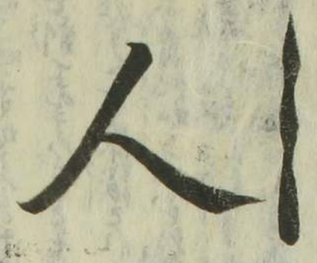
紙の始りの事

○まゝ紙と云へ天竺にかゝる
さ迦とのゝ長者樹の
葉の書をにつゝりて
佛法をゝろせりしのふさしだ
に長者の紙後世に
わるる年紙へ佛菩提をと
始して代々の祖師へ尾の
紙長者の葉の桃年のち
葉ちりさこそ泉涌
ちの筆に後後達磨元
年に宋紙よわらて桃
の一巻更に今に伝る
の山のやうと言ふ年のゝ
杉てそ伝ものとゝ

ゝ
ゝ
ゝ

弗

散

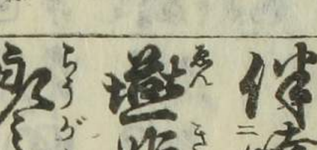


この弗散賢の三形一字の筆つろひとそ志ろべ万字と制作ること可宝

横竪弗散の写の初ようくゆひすべ〜

高麗の長くめど

人



春仏宵酒曾味

白

當坊流門禁花

月

感同歓形水離

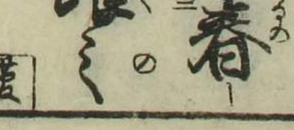
嘯舎三美氣

従混於吟裏躍

作嘆帰

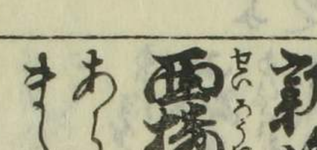
遷姫之袖碧収精溢龍如蓋抱周

良〜宵新別別同同如新花

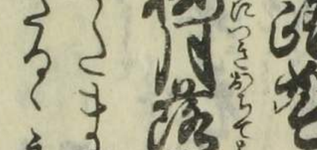


下

山三字絵あり〜八万字の色紙と道間約に約成にの仏

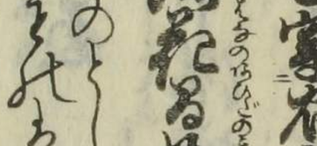


弗散横竪四形そかるる万字作ると山ふ点るるとあれ



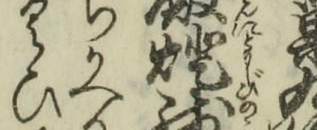
永字八法

永



新路於宴宿

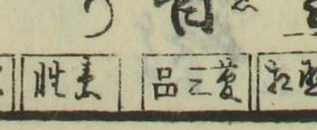
問巣の後鶴去雲



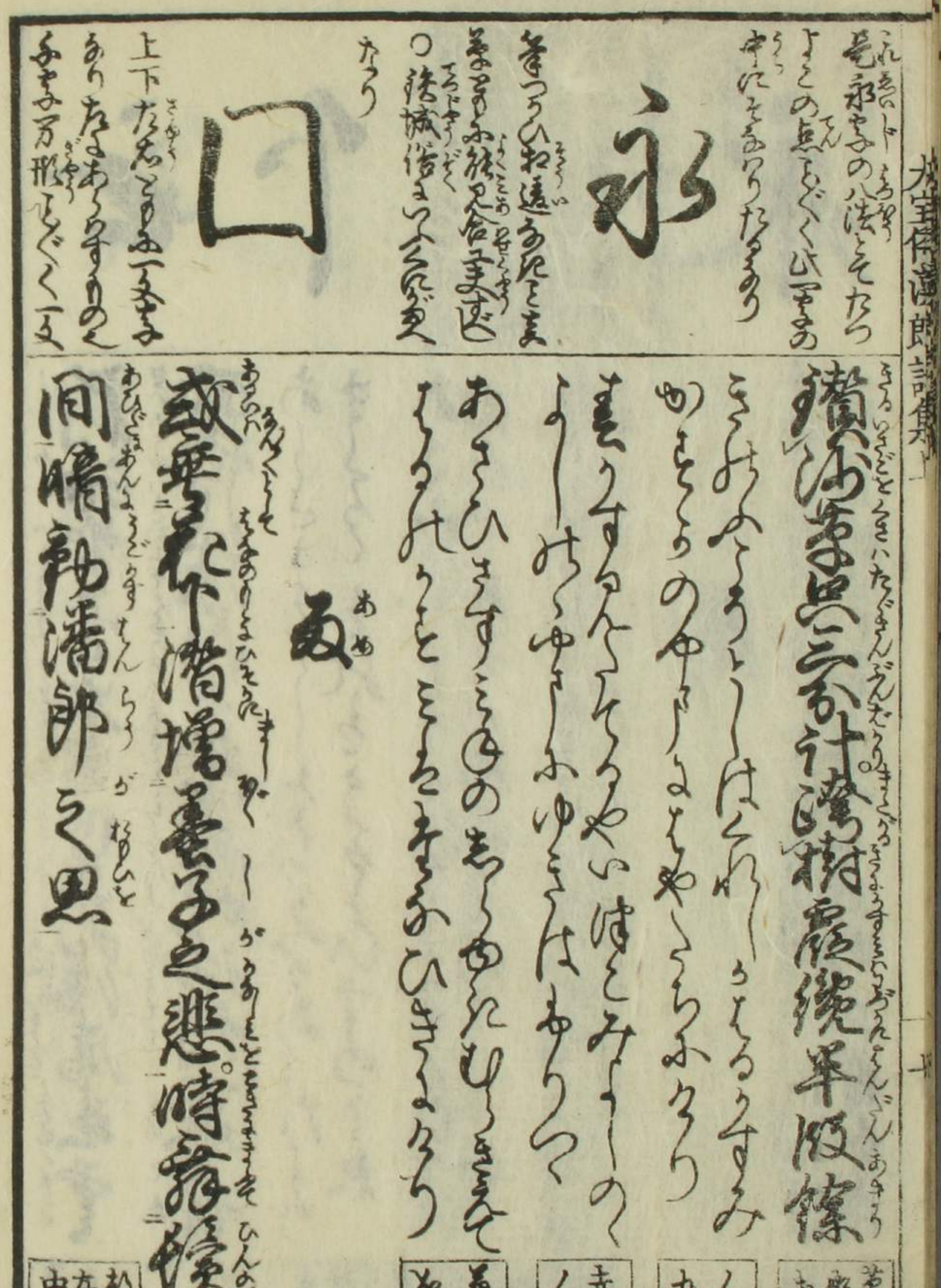
西橋門落新月無中殿燈行裏音

あ〜〜まのしみらるあ〜たらう

まるる〜れもそうるるひすのこ志



あるみ〜ろ〜〜〜

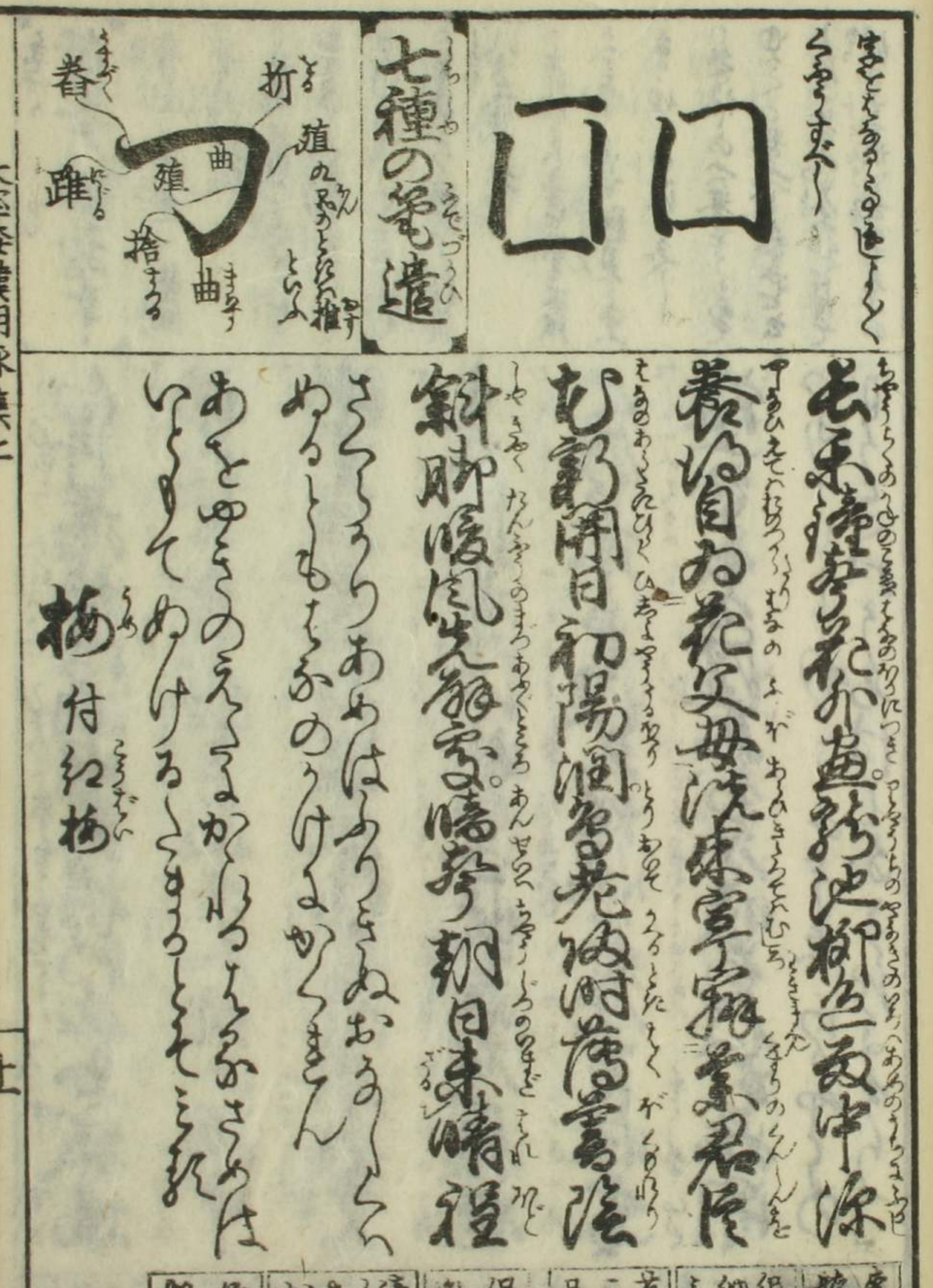


永

上下たがひあるすべのあるすべのあるすべのあるすべ

口

賣 恵 和　人 丸　赤 人　美 重　初 在 中



七種の毫遣

折　殖の殖　曲　殖　捨　曲　春　蹄

口口

家 嬉　紀 細 去　貴 之 品　保 亂　侯 人 之 す　伊 智

筆墨八四字事

筆用　筆墨　筆紙

筆法

○筆用　兎毫と称する筆を筆とひろく筆と定めて

ゆびとひろくしてすべし

○筆墨とは墨のことにて

八方へ法うべし

○筆紙とは筆と墨と紙

とをいふ紙と題見とを

あり紙ひろくべし

○筆法とは筆をとりて

ゆびとひろくしてすべし

○筆法とは筆の先を紙に付て

後ろを飛とをいふて

白汗落梅浮澗水　莫惜清香初出城

梅花帯雪元非白　和煙入酒中

潮音繞雪新詩裏　緑葉青陰未結実

青青陰陰結実　花開

雖言春色深　紅顔老

白居易　秦孝徳　村上序説　後江太郎　七条色白　菅三品　安倍仲麻呂

ありのくちのこの字のおくの字と

あるをよくしてすべし紙のおくの字を

すこしねさせてすべし字のおく

はうれるをしてすべし字決の

ちゆくかたをしたがへり

一をつくりひろくしてはつとあかりて二つとなりあ

あらはすあり

陽　陰

右のぢと合してかのごと

陽　陰

赤人　紅梅　昭明　え昭　房之亟　菜中玄王

紅梅

梅含紅色紅氣深　実隆花開紫文

満紅鮮婦紅方　宮魏色濃香都妓

煙うく煙濃薫

有色易香満宮庭　紅顔文明中

丸字活字の事

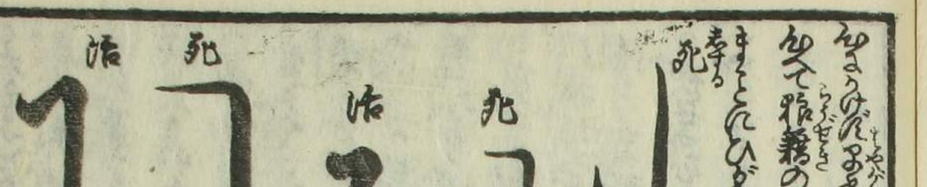
○活字を云ふは丸字なり

仙洞風生宝鼎雲。蓬山日照玉楊煙。
万年の春の色は千代をかけて
つもるうぶすなの神の御代
色うつれる世の中の
つもるうぶすなの神の御代

柳

林間行客迷芳草。掃地淮南鶴爆勾。
潮欲拂他新馬客。来時遮得上楊人。
巫女酌花紅袖舞。鄙村柳蔭白眉

紀奇名　武則　花山院　白　因　紀有名



ゆゑのひがごとを遠者をなして張義の筆とこのひがごとまことにひがごとあり

活字　丸字

誠知老去風情少。見此春来一日長。

白

大庾嶺之梅。落淮河柳。遥遥千里。

唐東開皇紀

田達音　紀仲元

雲霧紀流抄。楽日春畑夢。殊嬉柳風

後中主王　黄三品

愁宅遥月陽陸地遠日。多煙源

深谷原波。林岸風来。浪堅頭

あとのゆきのうかるはけるしるを

之平

○大文字とかくべし偽者は立て書三ホキ文字のこと筆づかひとかけそ法ゆふのあり

○小文字とかくべし偽者をかくるふるまひとれ清さきんをあらめて筆のけうとをしるくすべし

○古人の名書とたぐ書立

○教ひ筆とかくべし

○教学生形とかくべし

○教学生形とかくべし

○初学生とかくべし

初学生形とかくべし

○二重之事

二ホキ筆をかくて筆形に似たるのず筆つぎ筆

かくてそうら又筆の腰にそ

きべし点うくと筆の先

ゆそきべし点畫と結く

ゆよくそうべきあり

○三重之事

三ホキ筆の文字の長組

ホキ筆べたるう又筆

飛鳥者にしてたとへ

にうくしくきべき

○四重之事

初学生形とかくべ

ふ筆形のべたる初学生

てそ筆れ点と書べき

○二重之事

二ホキ筆をかくて筆形

に似たるのず筆つぎ筆

かくてそうら又筆の腰にそ

きべし点うくと筆の先

ゆそきべし点畫と結く

ゆよくそうべきあり

○三重之事

三ホキ筆の文字の長組

ホキ筆べたるう又筆

飛鳥者にしてたとへ

にうくしくきべき

○四重之事

[illegible]

初三三月

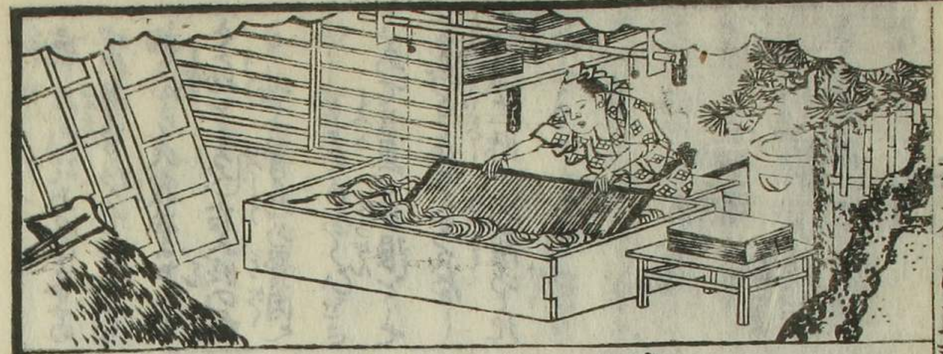
[illegible]

惟良

[illegible]

[illegible]

[illegible]



ものうれとものの門ごあろあ〜は
このるはうあさきーあすか

獺蹟

晩菜尚開紅獺蹟秋房初綻白芙蓉
秋遊人欲踏來把寒食花應折盡
打ひろ〜ときものやまれそつ〜
いとれいーそあまーひ〜さものと

紫冬

黏着雖黄天有色黏着漢綿雪毛風

乙太　白　源以　平点文　信胤乙

消息千字文

九重紙一筆一
綸一孔雀三孔雀
紅筆白深毛筆
と仕事孔貴簡
い仕事孔簡板
周板一焼号書
や厳様筆印撰
墨筆印撰
墨筆健去
墨去採生接泳
墨園去堅勝別

書意有者扶桑治紙五文未筆
いまやさうん〜ひうはよ新みて
ちうのやへけゆきひくくよ
なむちうのうみふ

梅

悵望意員三月春花落春開く
業花落紅花業行糧花業春夢
たうのうみうちへみうち花ある
うそゆんうあひ〜の〜ん

保胤　東見王　重重　白　源れ規　鶴九

（夏）

更衣

門雞性活猶宿燭開紅衣常陽年香

生衣紗結暑宿礦當於邑花酣

白　黄　白　紅紫出異　吹　白　日　紀納云

先年ヲ書ヲ朱賀る
光陰光賀ヲ朱儀
詩史詩と投又物又
物と具又ヲ新
山陰家門一門親
物ヲ無法ヲ母
喜達熱ヲ光新
和能脚ヲ仮れ
ヲ使ヲ口濃し
新姓宵冥加ヲ
拾恐人ヲ新面上

獲毛頭行禁流
若生石面輕衣
わ〻ものかゝ〻
夏夜
風吹拍水月
風生行衣ヲ
世ヲ新紙面閑

階花蕊薬〇千岁開
鄭階階蕊薬〇千岁開
鄭階階蕊薬〇千岁開
鄭階階

夢慈園之春
[illegible]
暑氣天氣氏
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

中人〻市司
宿所号報書
返〻手忘録
遣軍揚先大楽
書記遣日天遣
かひ決〻任章後
一事ト人後宣書後
乃安言美文ひ
号札美墨平絹
奉勅後絹被体
懐盃休先忘黄

白　許深　紀在昌　延喜市製　源乃実　良後正

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

明月出於海上 [illegible]

清豈換[illegible]

[illegible]

[illegible]

切忘須別恩人
還時數百錢一
伴西岳富貴人
扶侯對侯未舍
子逢知席投杯
去雖事如餐益
抵義招法是奉
侍希授く妻之
涙未暴お言く
授繰く敷西遊
與拾ふ法平僧

白

扇

盛夏不消雪紙
裏風門輝生
裏藏身入懷中

白

三品 菱

中務

元輔

中務

金作毛玉宿西
蓮立泊追笛之
風吹茅邪不顧
無く毛殺夜更
翌日翌朝今日
吉辰吉日撰
新毛根も普
遊賞生紀出来
元服淡粉付く袴
須戸住屋吹顔子
息鳥安吹慈用

秋

立秋

菊風涼風百義鑑淮敷計會一時秋

白

保胤

敏行

紙宣

露漸散間秋気ふ鑑毛緩処存殿
あくめしめあ
うきのおう
うちつけよ
あきのけし

早秋

但拭暑恐三伏上不知秋送二毛来

白

賢才膚智幼稚
成人
祖父祖母父親
兄弟姉妹甥姪
従弟伯父伯母
叔父叔母子孫
玄孫男姪聟
嫁婦義昌
聟業嫁業
父叔胎懐姙
産生降誕

槐花西涯紅林地桐葉風涼秋夜天
実景新涼為宗晚涼潤利蓋先知
あくらくいくくあくとこのねぬる
ゆくすけのうせたなくすくも

七夕

庭内乞巧竿頭上秋涼多
二星逢来別情後更恨秋河
明朱琴涼風袖〻之琴

祝儀就上進就
堂乗殿上
稲米玄下
配生配遠下
玄孫退玄叔
賞味賞就賞
注列乗名
家業嫁出
精加母梅
依利注利息
検約始末勘

家庭子孫
風波飛夜
玄叔母波
調汝波雖
あるれはあるとふかねも
くくくく

暗知宣案用
貴失臺徒事
寶琴金滅世
看高賣損涙
平均元出拂底
ふ糸氣糴貸
更易再意再三
汲ゝ為者金恨
又徒遠遠使使
價お漏性更九

秋興

白

林間燒酒燈望ふ石と題待掛添苦

同

老思荒宅水流寒琴清晚籠秋

同

大底四時ゝ勢苦。統中腸ゝ是秋て

野れ云

物色自堪傷客意直ゝ蕭字飛秋ん

中上

中華感田宅秋天多殺商時貴物

家弟一傷ん何ゝ家行ゝ隔世

皆海意出入咬
往ゝ為指南お
立道理ゝ行ゝ
逢麻畜立殺
立貴なるゝ
度ゝ世活家軍
家為物軍遠
持運日産人
立宰領上去
雍錢罰お意
意海意立ゝ

田達音

れ云

明前

蜀葵漸忘源ゝ味。搖絲新鴨擾雪春

白

秋晚

うゝくいとも四ゝあるこれを
れるゝ人ゝ
あるをなれゆゝ
をこのゝ

家為物

相思夕ゝ松意豆雲ゝ錄鮮滅身秋

白

月ゝ出ゝ月ゝ新種物意影ゝ信春

貴三品

陸士章労苦
南北苦辛中
知己得知都
貪著四季傷
立秋降逆義
意遠后逆中
性来性至富
海浪不平不
思富平宣悦
潮浄拍海岳
世之横日頃

白

月

月

月

秋来長夜眠天高聽蛩鳴
燕子橋中寄秋来共一人長
黄叶落源人寒後清雲長月明

月

月

月

節七十二候
玄車有枢
又正月終
未立氣立春
二月節長更
暑迫日脚氣
三月去春脚
四月去向暑
暑暑去暑
月去徽雨入
黄梅入六月

儀添延別
三天象中訳
富山表裏
十二廻中
年杜若
碧浪金波
盧自銀

玄 紀納 白 日 白 玄 侯 来

去暑暑去用
入暑暑大暑
去用色殘暑
強い七月去秋
暑終暑八九
月去処暑
節十月去寒
終時函暑
寒去霜降
十一月去寒
氣十二月去

過函谷関
藻中魚躍池便是尋常号世外清
明無如
金膏滴秋風
揚貴妃
みのりてうるはしかりしあきのまつりけり
ひそかなるのまるうなりけり

月

保 義 貴之品 源 水 水

[illegible]

[illegible]

秋水漲来船[illegible]

不辞[illegible]

天山[illegible]

欲和[illegible]

郷源[illegible]

[illegible]

白　鄭展　白　三統[illegible]　[illegible]　保[illegible]　[illegible]

中旬[illegible]月迫
[illegible]

[illegible]

九日　付菊

[illegible]

[illegible]

[illegible]

数ヶ所の里
もこの間一向に
知らぬ事こん
書不申候
半ば過ぎ見た
吊はこん不申
候こんの方有増
書状要用こん
ばかりこの通
浪華千宮文章

先三遊号頃甚だ如蟹量し鴨河
澄一丈十分号湯を彩絵嫁こん
廻洛川

日

蓋水流花源上流の上事老子仙家。

地脉和味倉日稚豆年新者立百
尚歳

日

中勢

ちかだくひの方ひ
○塔のへあの下れまり
ハ清ひまり釧の消ま
つくへたのへ迄へ
うまへへぐへへまり
○中のあへ紀伝ぐで
ばこまり。奥のひへ
釧の下れまり全
ひまりひまりへ
ハひまりさまへへ
へぶおひりぶひへ

菊

新蕾発黄三分白露新花正英

白

竜七中倫和蜀氏花開後更書花

元稹

崑法欲著契松栢後凋秋景早

移新芝蘭の先敗

記納之

郡縣村間皆凋落鬼子不重重

三名法幼

業苑自新為伯骨槿籬疎有長生

保胤

ゝ。端のへ洲の渚
の君又ちに書とる
月ゆゑうり殺べ侍。
いめ〳〵塚のまいへ
ゝり多くふに無
うまへ多まへなま
又注ふうゝ事なり
そのへ〳〵のかへ
ゝ。えへ洲の渚
ゆふうゝに月のを
ゝこゝえゝ

薫三品　敏外　月頃　帆　月

薫蕙荒樓琴後蓬萊洞月照琴中
ひさゝこのうふくゝうるきくゝを
あゝつりゝそけやまゝける
あゝあそゝやとんゝかゝもれ
おゝきまゝりけるきゝゝのゝか

九月盡

繼〳〵蒲萄園雅菊繁於宮闈紙
令垂貴勾遥何遥爽頼於風境
頭白淑世深者先秋格者老遥雅

以言　子里　菓蓋　以　月

絶ゝ　さえ
おゝえ　おゝ　又
つゝ。ふえ。あゝも
ちゝゆゝなり
○奥の多へ洲の渚
かゝゝふ月ゆゝや
○わゝくのわをよみ
いもこゝをにもこゝを
ふゝよ書こゝは
かゝゝひゝひ絶

文峯梅遠白鶴巢河海藏舟紅蓮秀
やまゝゝひゝあゝもゝあゝにゝゝ
まゝゝのゝゝゝりわけゝゝゝ
ゝゝゝりあゝのゝゝみゝわゝくゝものゝ
ゝゝゝゝゆゝひのゝゝゝをゝりゝゝ

女郎花

花色如愁露偏呼為美人同紅藏欲語
倩光恐無義首似君
をみゝゝへ
ゝゝゝ月ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

九　過　昭

いろはづくし

いろはい弘法大師つくせしなんぬのくらい
ゐなんぬのくらいの文字
法生滅こ己寂滅
為楽ゑをわすれて
ちりぬるを
わかよたれそ
つねならむ
うゐのおくやま
けふこえて
あさきゆめみし
ゑひもせす
京の宮ゐ法ゑ出ゑ

清晴 ヱ

ををなくこゑをあくさまて
いとしりはけあるをこひき

萩

曉霧晴花如餐百般拳折一時情

貴

人丸

侍賢

元輔

蘭

前頭史有蘭燈把花置裏葉三変霜

白

枝条豈無彩乎浮雲掩面無胃蔡宗

豈不芳乎秋風吹面先敗

疑似漢妖顔抱粉濃似殺人眼迫珠

おもとを

初良春

直幹

豊駕楚宮秋波横横妖艶横憲

恵性

撞

いろはの部字

いろはにほへと
伊呂波仁保へと止
ちりぬるをわか
知利奴流乎わか
よたれそつねな
与太れそつねな
らむうのおくや
ら武う乃おくや
まけふこえて
ま計ふこえて
あさきゆめみし
あさきゆめみし
ゑひもせす
ゑひもせす

松樹千年緑色新。梅樓花一日自為春。
来日不留離別有。拝最愛春花

遠樓離色春花

松つ樹千年緑色新。梅樓花一日自為春。
来日不留離別有。拝最愛春花

あさうかはるはるのいとまひろん
人ことことあさこそみうらあ

白　あ中ゑ五　た後ち初中　白

和歌

高貴郷花時偏養侍開

かさりかの部字

伊呂八二保邊止
いろはへにほへと
千利奴流乎曰加
ちりぬるをわか
與多礼曽猶闘子南
よたれそつねな
良牟宇井乃於久
らむうゐのおく
也末介不工江亭
やまけふこえて
阿草幾勇女三之
あさきゆめみし
恵比毛世須
ゑひもせす

遊自岩閑窟象僮倦。春樹春歌

秋草秋

閑思看池花紅色。岩巒白雪

置非稔爰思元亮花時供世弄

ちりとすすふしとうとさ
いのとうあるとこのう邦

紅葉付落葉

ゑ二品　保亂　ゑ二品　ゑ順

平字の部

着干耳毋本保
迺黒王年那当
元紙万満希遣
古豆亥亭悲布
盈亥畳毅化乗
安可亥堂
佐由阿志楚

不遠紅葉まさ地又芝源風雲がうのてん 白
英顔瀬林寒有紫猫橋水深無風 月
洞中清淺獨橋万延上蕭踈錦繡林 保 徹
外抱獨醒松洞色餘波合力歸沼琴 以言
〜〜〜

友奉等輩知云

近親知比鄰

眠睦邇似尋

愛幾庶及周

集参宮後這導

數計運般員枚

種籌筭量箇孤

形像方姿賢

堅固片象質良

興置業起息致

優遊曠蒲稚仙く樂

逍遥光陰眞晃晃月。毎物参不澤林風

あすこはのみちてなるつゆ〳〵さきのゆ〳〵しけれかせるあさ〳〵をようなんのりのこれもはるあしたをあまをうえもちなるれくゆめのうえのけきりうそ

鴈　付渡

雄緒少男臣尾

勝捷克兼金易

包周懷該攝

門廣稜柯楞

頼乃依倚階隨

職猶從幹據縁

因寄自資由藉憑

義吉好善快悦

祥福勝殊珍致

能理持淑懿穀

弟里人南去三春百花不知何業

月出南海同歸

昌陽深淵彫琴秋琴百引朱

四出桑山雨色五彩百題玉琴

雁弓雖遠未抛題於上淫之月懸琴

弟易遥花於下流く水急

百龍碧落青紙集琴新來破流撥

類徳良美由若
可資今愛嘉榮
宣喜賢敬憙督
賀富幸慶寂綏
至住 代 世俗吉
陸 標殷社高孝
教位好延上楚
敬天阜尊貴
崇譽尭喬棟陟
忠 尹唯齊直正

公只品内覧董徂
任理政紀渡啻
妙均雅矯格彈
武 長竹建全孟
胤 種植 堪 任断
絶能勝當妙耐
連 列行般諸
綿陣貫番 経
續 次嗣紹序族
胤番著 綱 統阜

恒 経常懐道庸方
毎歴矩似式序
成 業生也爲
登濟作霽得
諧往晴造孝慈
仲 中遐祥長
永壽脩度條
猶 直尚仍名字
号號宗旨胸棟
統致概信伸脩

きりくをつくるみなくうあくのこれ
たくさうくみあるくまくまくる

鹿

養善濟滑脩時寺紀案孝乾廉在林
晴遣食薄飛色変更隨加雪涙風来
りみちきねくれたるのやくくすむくうは
おのくをくるそやあくくしくくん
いくくくくくのやくくふなくくくみ
しくのくくくやくくくとくくくむ

壁 白 紀納云 紙宝 也之

誠諶延述舒陳
叙順暢肆經列
敷宜序庸命言
展書正常業之
則 刑乗儀伯似
規法德記軌納
狀悟卿教矩猷
雅師識言令範
了永式章憲度
典尋周智義彝

陽九度初三夜霧似眞珠月似弓
家満業薫色白風働松葉雅花清
竹雲暁霧徹嶺頻庭頻風清美色沢
雑熱夕雲堆人抗松色朝雲云者鶴
あくくくくく

乘孝國之邑邦
州郡城都業
安康泰保寧易
逸慶息昆慰賢
穩德術休快懐
正當政雅箴成
尹匡將齊理昌
方董官應眞祇和
暢順幹濟備
黨房總葉宣種

亮維幾興記惟
此是之斯伊枝
條族柯朶明
昭詮諦秋顯飲
頭聡聽招朗章
信著晶成察覺
審白有在現得
盈厚篤敦淳適
重鄉閭里邑巷
真實核積信仁

孫誠嗣子咸守
定貞正完自潔
清淨精雪静樹
村規城起紀來
木興宜藝黄行
往征徧之如言
遊適致以詣敬
塡光充盈並躬
身體相視規親

白

冬夜

一盞寒燈夜殺宣溫耐雪中春
年光自向燈前盡客思惟須枕上生
杳杳鐘聲月落時萬家砧杵一聲悲
歲華

白

靚瞻鑑見子美
質皆覽三通道
途達徑跡路方
滋林重繁薫芝
茂臣秀英任昆
堪久古昔上
仁人者云君公
仁豊爲集平
夷均位衡廣寛
泰弘衆庶兩諸

風雲易向人間盡歲月難從老處生
ゆくものをとどめあらぬふるさとの
ゆくすえもとおもふ

白

焙火

英張緑碧連冬淡絳紫紅焙遂春開

白

着垂馬穂垂曙裏風光波火連

白

燃火無煙花樹邪對茅茨日有春情

白

地時飛碎雪花下近日那離獸炭過

白

師 持 將 住 須 以
用 本 元 基 舊 花
臺 許 根 守 盛 森
隅 純 維 清 角 炭
佐 傅 助 祐 弼 貳
右 介 亮 輔 季 抄
末 梢 相 遇 逢 影
蔭 陰 景 長 益 增
倍 照 光 輝 富 福
阿 隈 熊 藏 庫 掠

うたゝひのかくあるまくとりそ見ゆるを 霜 平葉

三秋岩菅花初白夜林紅葉五紅 遊 鶴

冬日家相年 白

國宝姜孫武添孤婦乞張上山源

感動先侵四時白乞驕色 納 玄 紀

君子取源於蓮老花年晩懷紅鶴 白 黄

右 全 又 雨 亦 也 香 哉 歟
氏 姓 村 樹 城
備 來 珍 幹 家 宅
舍 屋 松 待 俟
須 頭 首 上 正 守
尹 利 稔 俊 敏
年 載 歲 紀 暮 禩

名字字統

夢乞已郎夢乞中鶴出く初鶴葛屋人 黄 品 三

最積尾海紀名 容色歌 花 歌 鶴 容 紀 納 玄

秋さもあ秋さもあ秋さもあ

書札文字巻頭

一筆　一筆　一筆
一筆　一筆
御　御　御
清　清　清
ほ　ほ　ほ
○候　○申　○以上
様　様　様
様　様　様
殿　殿　殿
○奉　御中

雪の鶴毛花数孔人　波羅蜜直飛個　白
武蹴風不返ぬ振袖羅ゑく毛ゑ高晴　紀納言
狐狸鬚襟扇狐之腰　村上御製
翅の白雪插浦波ん遊要眞掉舟人　茂
豆腐蹴上頭ゑ鶴笙在短歌を不龍　義
羽毛園中秋色搭立蓋上秋琴拝　系明
ゑゑゑゑめゑゑ　ゑゑゑゑゑゑゑゑ
ゑゑゑゑゑゑゑゑ

ゑゑゑゑゑゑゑゑ　上
ゑゑゑゑゑゑゑゑ　中
○奉　奉　奉　

照付之下

樣 杭上 白氏文集 近如流水拔毒蛇

樣 杭上 白氏文集 如流水拔毒蛇

樣 上 文選 注中

樣 中の上 文選 注中

樣 中の下 文選 注中

遠樣振付之下

樣 杭上 白氏文集 如流水拔毒蛇

樣 上 文選 注中

樣 上 文選 注中

氷消漢立無根霸 雲盛巫山夢入樓

白 紀 白

烟塞雁能含使客愁 塵飛陀室忘生死恵

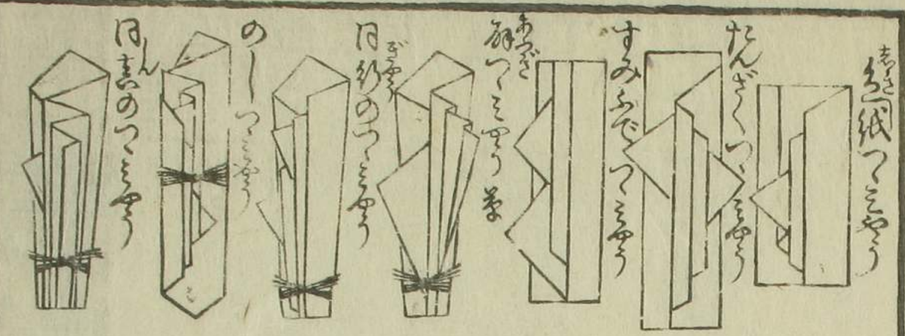
紀 白 紀

雁 正

霧

塵埃千年散 脫袈裟頭珠投顆 蓋

蓋 白



佛名

香火一燈照千年 盂盆白頭夜禮佛名經 白

香自深心爐裏出 閑合掌不開金 蓋

あしたもくれもつくるかな法のつかさ

つくるものすなりやいかん

やそとせはかりふりつもりにけを

おくるむなしきくらの年

ちーのちるつくるもるにけるを

つくるものとふるをなをなを

大寶傍漢朗詠集上卷 平

白 蓋 白 之